

一方可溶性画分のSODについては変化が認められなかった。Mt SOD活性の増大は発症群マウス各臓器における高濃度のO₂含量を予想せしめ、今後とも研究を進めねばならない。表2.に肝および腎MsにおけるチトクロームP-450含量、薬物水酸化ならびに中級脂肪酸のω水酸化活性を示す。肝においては発症群未発症群に差異は認められなかったが、脂肪酸のω水酸化に特異的に働く腎Msにおいて、同活性が著明に亢進していることが認められた。今後例数を増やして確め、その意義を考えていきたい。

表 2.

dy/dy マウスおよび+/+ 又は dy/+ マウスのマイクロゾーム画分におけるP-450含量ならびに薬物水酸化活性と脂肪酸ω水酸化活性	dy/dy		+/+ 又は dy/+	
	肝	腎	肝	腎
	チトクロームP-450 (nモル/mgタン白)	0.89	0.042	1.12
アニリン水酸化活性 (nモル/分/mgタン白)	1.88	0.072	1.49	0.27
アミノピリン水酸化活性 (")	5.96	0.00	6.08	0.80
ベンツピレン水酸化活性 (")	3.42	0.05	3.56	0.095
ミリスティン酸の水酸化活性 (")	2.73	2.00	2.17	0.81
" (cpm × 10 ⁴ /分/nモルP-450)	3.07	47.6	1.94	7.86

28 進行性筋ジストロフィー症の染色体の研究

国立療養所刀根山病院

蔦 宗 俊 明 谷 淳 吉

本院入院患者及び本院PMD外来通院患者について末梢血培養法を用いて染色体検査を行った。その中でF SH型筋ジストロフィー症患者1名について染色体異常を疑せる所見を見出したので報告する。

〔症 例〕

Y・N、37才男性、16才頃より筋ジストロフィー症発症、F SH型筋ジストロフィー症として本院PMD外来通院中であつたが本年12月十二脂潰瘍として本院外科入院中。独身。家族歴、特記事項無し。

〔材料と方法〕

ヘパリン加末梢血より白血球を分離し、PHA-Mを加え Eagles MEM培地を用いて、Falcon petri dish 上で64-72時間 CO₂ インキュベーター内で培養した。

染色体標本は air-drying 法を用いて作成した。

〔結果と検討〕

核板は 500 個検討した。484 個 (96.8%) は diploid で核型も正常であった。

9 個 (1.8%) は染色体数47を示し、そのうち 3 個について核型分析を行なったところ、Fig 1. に示すようにD group と考えられる telocentric な染色体 1 個の増加が 3 核板共通に見出された。

染色体数54を示すものも 1 個 (0.02%) 見出された。

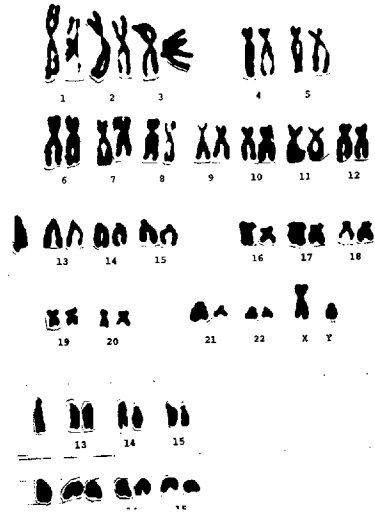
染色体数については、Makino (1974)によれば、染色体数47を示す染色体数異常の頻度は約 0.6% と報告されているが、本例に関しては 1.8% と約 3 倍であり、かつ核型が一致していることが注目される。

D₁ トリソミー症候群の症状である発育障害、hypertelorism、cryptorchism、eye defects、short neck etc はなく、又 46, XY/47, XY、D₁ + として従来報告されている例とも症状が一致しなかった。

患者自身、現在独居中であるが社会人として職業をもち、介助を要していない。

47の染色体数を示す核型については、なお異常と断定するには問題点が多いため、現在患者の腹筋由来の細胞を組織培養し、染色体を検討中である。

Fig 1.



↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

本院入院患者及び本院 PMD 外来通院患者について末梢血培養法を用いて染色体検査を行った。その中で FSH 型筋ジストロフィー症患者 1 名について染色体異常を疑せる所見を見出したので報告する。

〔症例〕

Y・N、37 才男性、16 才頃より筋ジストロフィー症発症、FSH 型筋ジストロフィー症として本院 PMD 外来通院中であつたが本年 12 月十二指腸潰瘍として本院外科入院中。独身。家族歴、特記事項無し。